

はかなきなれを只ひとり枝に残していつまでか
ながめて暮す人やある、いでや散して先きの日に
なれが親しき友どちの散りて飾りし花園の
寢床の上になれを置き其友人を訪はずべし

三

いとしき友のいにし時吾身もいかで後るべき
愛の光のかやけるまとの中につれなくも
夜半の嵐のさそひ来てまごころこめし友垣を
つれていぬらん時こそは吾身もいかで後るべき

かの燈火は

雨 峰 生

かの燈火は 人けなき
世をさけて 朝夕に
うさなやみ 塵もそます
暮す堂守の

庵なるらし 秋は野山に
風たちて、 此の頃は
悲さまさる ひとり住託ぶ
ひとり住託ぶ 身にさわる
思ぞきよし 路に迷ひて
旅人の 路に迷ひて
灯めざしつ たづねよる
語らへば 冷たけき
消えてあとなし 世のわずらひも
堂守とて われも人なり
味にぞすみぬ 熱き血も
籠れるを つれなしと
堂守るわれ 君ないひそ
雨ふれば 帯ももれと
廂どうてど 静かなる
風ふけば 夜半の燈

いつの世の 幾人々の 守りの神となれるを知るか

短歌

真宮起雲選

○ 深野貞子

呼びとめて處を問へば泣伏しぬ母をたづぬる女
願禮

病む母に仕へて名ある花うりの少女の袖に夕風
さむき

○ 金丸ともへ

のこしませし一人子抱きて亡き夫の昔語りぬ燈

火の前

うす月のはのめさ渡る秋の野に雁の聲さくわが
すくせ哉

○ 加藤芳子

新室にうぶ湯匂へる白菊やのぞみの光りたゞさ
みに見る

瑠璃玉の露うつくしき秋の野にはえをはこるか

桔梗刈萱

○ 吉郎絹子

夕雲のちぎれくに飛ぶ見えて鐘冷かさあきの
くれかな

○ 竹尾玉枝

しばしよと白きみ衣の人とめて道を尋ぬる秋の
ゆふ野や

○ 白雪女史

あてがれて彩虹追はゞふと消えて夕野に迷ふ人
の世も哉

子規いづれを指して啼き行くよ母のみ國は月に